

金田地区の産業 「地区での栽培作物（明治編）」

金田村について村政要覧的な内容の『金田村誌』『金田小学校編』があります、年度は1911（明治44）年、明治時代の金田村の社会を知ることが出来ます。

紹介する資料は、村誌の原本ではなく、金田村役場の用紙にコピーされています。その中から、産業に関連する内容を記述します。

<尚 元文に（、。）を挿入し、・以下には簡単な解説を加筆しています>

金田村誌 金田小学校編

■ <区画> （大字）飯島、 （大字）寺田縄、 （大字）入野、 （大字）長持、
（大字）入部

・ 明治22年に金田村が誕生しました。それまでの各村落は、金田村に統合され、大字という行政区画に組み入れられました。（大字）入部は江戸時代を通して、人の居住がありませんでしたが、行政区画上金田村の大字と区画されました。金目川右岸、水神橋を渡って字舞台の南になります。

■ <戸数> 179戸（内 農業 175戸、 商業 4戸）

- ・ 江戸期末は 150戸（風土記稿）とありました。
- ・ 資料からは、179戸の内175戸が農家です。金田村は純粋な農村社会でした。

■ <人口> 1573名（男 788名、 女 785名）

人口統計上金田村の戸数179戸は明治期から大正初期にかけての戸数と判断されますが、人口の1573名は一戸当たり8.8名となり、大家族を形作っていたこととなります。「わくしたちの住むまち金田」によりますと、人口が1573名となるのは1940（昭和15）年頃、この年は213世帯を数えています。この人口数は、誤りとも考えられますが・・・。

■ <人家>

北より寺田縄、入野と順次に鈴川右岸に沿って本村の東部に偏在し、本村は（ママ・「飯島は」の誤記か）金目川の左岸に沿って本村の西北隅に、長持は本村の最南にありて、同じく金目川の左岸に沿って東北入野に接続せり。

尚、金目川の右岸入野小字飯島に2戸点在す。大字入部には民戸なし。

■ <地勢>

本村は地勢恰（あたか）も南北に長き菱形を為す。北方雨降山脈に発源せる金目川、鈴川、玉川等皆本村を経て、南方相模湾に注入するを以て、地勢自ら西北に高く東南に低し、人家を除くの外悉（ことごと）く耕地ならざるはなし。

- ・ 金田村の地形は扇状地と指摘され、飯島方面に高く、東部の鈴川方面、鈴川と金目川が接近する南部方面に低くなっています。両河川の流路、水田の用水の流れ、農業排水路の流れに金田村の地形特徴を知ることができます。

■ <川>

金目川、鈴川、玉川の三流あり。

金目川は源を中郡東秦野村春嶽山より発し、金目村を経て本村に入り、菱形をなせる本村の南北対角線の稍（やや）西部を並行して、東南を貫流し平塚町に至り玉川と合して花水川となり大磯の海に注ぐ。

ア河底高くして其灌漑の利便全村に普及し全村耕地の生命なり。故を以て、一朝流水の欠乏をきたすや村民血眼となりて日夜引水に奔走す。□に本村のみならず、此流域皆然りために往々葛藤を生ずることあり。

若し又エ之に反して大雨洪水を起こすことあらんか。其の流勢甚だ激烈を極め以て必ず堤防を決潰せずんば己まず其漲溢（ちょういつ）するところの水広く耕地に汜濫して被害の惨実（さんじつ）に名状すべからず。故を以て水源春嶽山は禁伐木となり堤防の修築をささおこたりなし。

ア 河底高くして其灌漑の利便全村に普及し全村耕地の生命なり

- ・ 江戸期、1706（宝永 3）年に金目川は人工的に堀替えられ、今日のような流れになりました。河底が平地より高い（天井川）として造成され、地域の農業用水の取水堰が設けられ用水の確保が容易になりました。金目川は、「命の川」「母なる川」とよばれます。

イ 一朝流水の欠乏をきたすや村民血眼となりて日夜引水に奔走す

- ・ 金目川は、重要な農業用水を確保してきましたが、ひとたび、雨が少なく渇水期になると用水不足をきたし、村々では流れの中に蛇籠などで水を堰き止め、用水確保に奔走しました。

ウ 此流域皆然りために往々葛藤を生ずることあり。

- ・ 天候条件は各村々も同じ影響を受けます。金目川の水量の減少は農業用水を金目川に依存する村々にとって、死活問題となります。結果、幾度となく「水争い」が生じました。

エ 之に反して大雨洪水を起こすことあらんか。

- ・ 金目川は、水源が丹沢山地、流水の距離が短く、ひとたび台風などで降水量が増えれば、増水し一気に河口へ向けて流れ下ります。そのため、堤防を溢水したり、損壊したりし、下流地域は水害に悩まされてきました。

鈴川は雨降山より発源し、岡崎村より本村にいきり、本村と豊田村及大野村と境をなし、玉川に合す、恰（あたか）も菱形の東部一辺を劃す。この川は底深くして排水上の利便大なり。

- ・ 鈴川付近は、金田村の東部に相当し、村内では標高の低い地域です。金田村の排水の多くは鈴川に流されています。

玉川は亦源を雨降山より発し、豊田村大野村を経て本村の東南境を流れ鈴川を合せ（水路僅に六十六間）平塚に至りて金目川と合す。

玉川、鈴川共に排水の利ありと雖も下流の幅員割合に狭きを以て、一朝霪雨に際せば漫々溢れて付近の耕地に逆流して、或は物作を水蝕（むしばむ）せしめ、或は表土を洗い去りその被害頗る（すこぶる）大なり。

霪雨（いんう・いつまでも降り続く雨） 漫々（まんまん・広く果てしないさま）

■ <生業>

本村の地勢既記の如く全く金目川流域に於ける肥沃の土地なれば、住民の生業ほとんど全く農に属し商工漁業の如きはいずれも其兼業にすぎず、近年寺田縄及入野長持に於いては耕地整理を施行し、乾田二毛作を為す等其普通作物園芸に熱心に従事せり。養蚕業亦盛んに行われ、鶏豚等の畜産の収益も少なからず。

■ <産物> 本村産物の梗概（こうがい・おおむね）を最新の調査によりて左に表示せん。

品名	数量	費消売出の状況
粳米 うるちまい	2340石8斗	半ば売出
糯米 もちごめ	246石4斗	多少売出
陸稻 おかぼ	15石6斗	消費
粟 あわ	7石5斗	全上
蕎麦 そば	1石	全上
大麦	595石7斗	全上
小麦	124石8斗	全上
大豆	3石6斗	全上
小豆	8石4斗	全上

油 菜	3石5斗	全 上
甘 藷 さつまいも	12280貫	全 上 多少売出
大 根	30671貫	全 上
里 芋	7800貫	多少売出
胡 瓜 きゅうり	6百円	売価概算
茄 子 なす	殆ど胡瓜と同じ	売価概算
繭 まゆ	83石8斗	大半売出
鰻 うなぎ	150貫	売 出
泥鰌 どじょう	300貫	全 上

牛	4頭	
馬	3頭	
豚	129頭	
鶏	1126羽	

- 金田地区の自然地形は明治時代と現代とでは、大きな違いはありません。しかし、農地は、中郡の中で先駆けとなった耕地整理が実施されました。それに続き、水田地帯に暗渠排水が施され、農地に二毛作が行われるようになりました。

- 圃場の改善により、生産は拡大されましたが、水田を中心とする農業形態が続きました。産物としては水田からの収穫が多くを記録しています。

- 畑作では甘藷（サツマイモ）の生産が多く“多少売り出し”記録から、多くは食用として利用されていたと思われます。ナシ、モモ、イチゴの記録はありません。

金田産の里芋、きゅうりは現在も金田村の特産品となっています。

“繭”の生産が記録されています。換金作物（商品作物）として有用な産物でした。

- 鰻の記録もあります。飯島が中心だったようですが、“うなぎや”という屋号の家がありました。

- 牛、馬の記録もありますが、4、3頭という保有数は、金田村の農業に家畜の導入はほとんどなかったこととなります。農作業は人手・人力に依存していました。